
IS <インフィニット・ストラトス> 妄想SS 『エロDVD編』

ソダグァ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS<インフィニット・ストラトス>妄想SS 『エロDVD編』

【Nコード】

N3544R

【作者名】

ゾダグア

【あらすじ】

周囲が女ばかりのIS学園で、唯一の男の一夏くんはいろいろと溜まっているだろう。そんな妄想からスタートした超短編です。

2011年3月10日加筆修正。

（前書き）

この作品には隠喩などをふくめて性に関する情報や描写がふくまれています。もし不快感を得られたら、速やかに読むことを切り上げることを推奨します。

『インフィニット・ストラトス』

宇宙空間での活動を想定して作られた、マルチフォーム・スーツ。既存の兵器を凌駕する性能のため軍事利用されたが、現在はスポーツとしての戦闘に用いられる。また、女性しか使用できないという特性から、女尊男卑の風潮が起こり、社会問題となっている。

infinitite stratus

あいえす

関連

IS

篠ノ之束

しののたばね

『太公望書林国語辞典第4版』（2007年）より

IS操縦者を育成するために設立された教育機関、公立『IS学園』。そのメインストリートから学生寮に至る道で、ただ一人の男子学生の織斑一夏は何かを探していた。

「いったいどこに行っただ……」

彼は植木をかき分け、這いつくばってベンチの下を覗きこみ、出会った生徒には残らず声をかけて何かを尋ねる。

真剣というよりは狂気じみていた。とは、彼に話しかけられた2年生の生徒の言である。

実際、彼は狂気に陥ってもしようがない状況だった。

「どこに行っただ、あのDVD……」

彼は、失くしたエロDVDを探しているのである。

IS<インフィニット・ストラトス>妄想SS
『エロDVD編』

話の発端は3日ほど前。いつも早起きな一夏が、いやに気分よく目覚めたことから始まる。

目覚めた瞬間こそ気持ち良かったが、意識が覚醒すると一夏はトランクスの中身 特に彼の分身の辺りに不快感を得た。それはひんやりとした、そして粘っこい感触。

「やべえ、漏らした……」

彼の名誉のために言うが、彼が漏らした“モノ”は尿ではない。

「急いで洗わないと……。このまま洗濯になんか出したら、絶対に噂になっちゃう」

一夏はベッドから抜け出ると、急いで替えの下着を出して履き替える。そして脱いだ方を手に持って部屋にあるシャワー室に駆けこんだ。

「箒やシャルが居た時だったらヤバかったな……。しばらく抜いてなかったけど、まさかこんなことになるとは」

トランクスの表裏をひっくり返してごしごしと水洗い。

しばらく蛇口の水を出しっぱなしにしていると、やがて粘性のある液体は流れ落ちたのだろう。一夏はコックをひねって水を止める。そして絞って水気をきり、下着を浴槽の淵にかけた。

「さて、今は……って、もうこんな時間かよ！」

慌てて着替えた一夏は部屋から駆けだして行った。

この問題の発端となった出来事、それは……夢精であった。

健全な15歳の男子なら、おかしい現象ではない。まあ、こうなる前に抜いておくことが普通なのだが、少し事情があったのだ。

授業では肌の露出が多いISスーツを着た女子生徒に囲まれ、寮に戻ればラフな格好で同年代の少女たちが闊歩する。今でこそ改善されたが、一時は女子生徒と同室でさえあったのだ。あの風呂あがりの独特の色気や、壁一枚さえ隔てないで行われる着替え。そして共に入浴したことさえあるのだ。“分身が勃ってしまった、治まるまで誤魔化す”スキルについては、今の一夏は世界でも随一かもしれない。

そして授業後にやっているISの特訓も彼の内なる衝動に拍車をかけた。テストステロンなどと言った男性ホルモンが関係するそうなのだが、医学的な説明は割愛する。

まあとにかく、彼は色々と溜まっていた。

××××××××××

「ありがとうございました」

それから数時間ほど後、自宅の掃除のついでに一夏はピンクな本屋に寄り、幾つかブツを仕入れていた。

ブツとは何かって？ 察しろ。

とにかく仕入れて学園に戻ってきたのは良いが、各国からの生徒を受け入れているために厳戒警備のIS学園では入口で持ち物検査を行っているのである。

「年頃の男ならしょうがないよな。頑張れよ、少年」

一応見えないように鞆の奥底に隠してはいたものの、バレないはずはない。

警備員さんの厚情を受けて没収を免れたものの、女生徒たちにブツを見られないように急いでしたのがいけなかった。一年生の寮に向かう道中で、一夏は一枚のディスクを落としてしまった。

気付いたのは、彼の部屋である1025室で鞆の中身を広げた時であつた……。

××××××××××

「あら、何か落ちていますわね」

ところ変わって学生寮の廊下。

一夏にとって友人の一人であるセシリア・オルコットがディスクケースを拾っていた。

賢明なる読者諸兄にはわかりだろうが、一夏のエロDVDである。女尊男卑の今のご時世では女性団体が変に力を持っているため、

エロコンテンツは一見して中身が分からない仕様になっている。それでもなんとなくパッケージングの雰囲気やら特徴はあって分かる人には分かるようになっていらいが、お嬢さま育ち、しかも外国人のセシリアに日本のエロDVDの特徴など分かるはずもなかった。

「落とした方は探していらっしゃるでしょうし、とりあえず事務にでも届けましょうか」

困っている者に手を差し伸べるのは『貴族の務め』ですわ。などと考えてセシリアは事務室に足を向ける。
と、その時見知った姿がやってきた。

××××××××××

「シャルロット。日本には変わった風習があるようだな」

シャルロット・デュノアは友人の言葉に、思わず「は？」と返さざるを得なかった。

「あちらで嫁が何かやっているのだが、手伝うべきだろうか？」

友人 ラウラ・ボーデヴィツヒの視線の先を見ると、彼女らが好意を寄せる男子 織村一夏が地面に這いつくばっていた。

「えーと、何か探してるのかな？ 聞いてみようか」

「そうだな」

2人は小走りで一夏の下に行く。

「一夏！」

「ん？ シャルにラウラ！？」

呼びかけたところ一夏はえらく驚いているようだ。
シャルロットが疑問に思っていると、ラウラが質問していた。

「嫁よ、地面に這いつくばって一体どうしたのだ？ 何か探索中ならば手伝うが……」

「探索……ああ。ちよつと探し物を、な。ちよつとディスクを落としちまったんだ。この位の大きさのケースに入っているんだが、2人とも何か知ってないか？」

なるほど、落としものか。誰かのスカートの中を覗こうとしているんじゃないかってよかった。でも、もしそうだったら僕のパンツを見せてあげても……。

一夏が聞いたら文句を言いそうなことを考えたシャルロットだが、そんなことをおくびにも見せずにラウラに話を振る。

「ごめん一夏。そう言った話は聞いてない。ラウラは？」

「私も聞かないな」

彼女も心当たりはないようだった。

「もし知っている人がいたら、多分俺のだって伝えてくれないか」

一夏はなぜかほつとした顔を見ると、そう言って再び地面に這い

つくばった。

「私も手伝おう」

「いや、大丈夫」

「だが……」

なぜか手伝いの申し出を一夏は断り続けていたが、やがて折れた。

「わかった。それなら伝言を頼まれてくれないか。『決して、何が映っているのかわ見ないでくれ』って」

「わかった。しかし、一体何のデータが入っているのだ？」

ラウラの質問に一夏はすぐには答えなかった。

「ちょ……ちょっと言いにくいものなんだ」

「気になるな。夫婦の間に隠し事は不要だろう？」

シャルロットからしても気になる話だが、人にとって言いたくないことはある。彼女はラウラを止めることにした。

「ラウラ、一夏が困ってるよ？　きっと言いにくいものなんだろうし、ここは引いてあげようよ」

「むう……ならしかたないか」

「見つけたら連絡するね」

謎を残しつつも、2人は一夏を置いて寮へと足を向けた。

××××××××××

「セシリアじゃない」

「あら、鈴さん」

セシリアが出会ったのは鳳^{ファンゼンイン}鈴音。クラスこそ違うものの、一夏との関係で敵対したり共闘したりと、まあ友人と言ってもいい関係である。

「どうしたの、それ？」

「さっき廊下で拾いましたので、これから落し物として届けようかと」

「ふん。なら、事務室か。途中まで一緒ね」

××××××××××

ほとんど幽霊部員となっていた剣道部に久々に顔を出した帰り、篠ノ之箒は廊下で後から友人に声をかけられた。

「箒」

シャルロットとラウラ。共にある男を巡って浅からぬ縁がある。箒は彼女達の下に歩いて行く。

「シャルロットにラウラか。帰りか」

「ああ。ところで箒、ケースに収まったディスクに心当たりはないか？」

「いや、私は見ていないが……。それは何のディスクなんだ？」

箒が訊ねると、シャルロットが少し困ったように答える。

「それが、よく分からないんだよね。

一夏が必死になって探していたから力になってあげたいんだけど、『決して、何が映っているのかわ見ないでくれ』って、拾った人に伝えてほしいなんていうくらいだし、教えてくれなかったんだよ」

なんだ、それは。どれが一夏のものかわからないではないか。

最初箒は呆れたものの、シャルロットたちの顔にも困惑の色があることから、彼女らもまた箒と同様なのだ。

3人はそのまま一緒に寮に向かった。

× × × × × × × × × ×

「あら、」

「む」

一緒に事務室のある教職員棟へと向かっていたセシリアと鈴音は、恋敵3人と遭遇した。

「な、なぜ私に注目してらっしゃるのですか？」

3人はセシリアを、正確に言えば彼女の手にあるディスクケースに注目していた。

3人はなにやら少し牽制し合っていたようだが、やがて箒が口を開いた。

「そのケースはどうしたんだ」

「え、拾ったんですけど……どなたがお心当たりが？」

「ああ。たぶん一夏のだ」

瞬間、場の空気が凍った。

セシリアと鈴音を除く3人はアイコンタクトだけで意志を通じ合わせ、彼女の抜け駆けを封じるために囲む。

「み……皆さんどうなさいましたの？」

セシリアはバレていないつもりだったかもしれないが、彼女の足は方向を一夏の部屋へと向けていた。

「生憎だが、嫁なら外で探していたぞ。部屋にはまだ戻っていない」

ふっ…と、ニヒルな笑みを浮かべてラウラがセシリアを見下ろす。ラウラの方が身長は低いが、精神的には見下ろしていただろう。

「せっかくだから、返す前に見てみないか？」

5人は牽制し合っていたが、箒の言葉にセシリアとラウラは得心が行ったとばかりに手を打った。

「や、やめておいた方がいいと思うよ」

「そうそう。きっと口くでもないことになるって」

こう言う時にストッパーになるのは大抵がシャルロットだ。だが今回は鈴音も反対側に回っていた。いつもなら率先してやりそうな彼女の反応を4人は訝しむ。

「なんか、イヤな予感がするのよ。前に一夏ん家に遊びに行った時、ベッドの下から……。み、見るなら勝手に見てよね。あたしは用事があるから。じゃあね！」

鈴音は何か誤魔化すようにその場から去っていく。

と、なると止めるのはシャルロットのみだ。だが残る3人の説得というか、悪魔のささやきに彼女も抗しえなくなってしまう……。――

「それじゃあ、僕らの部屋で見ようか」

と言う事になってしまった。

××××××××××

「それじゃあ再生するよ」

シャルロットとラウラの部屋。機器の操作をするシャルロット以外の3人は各自ベッドに腰かけたり立っていたり床に座ったりと、位置はバラバラながらもテレビに注目していた。

「スタート」

シャルロットがリモコンの再生ボタンを押す。
数分後、廊下まで悲鳴が響き渡った。

×××××××××

「遅かったか……」

探索を諦めて部屋に戻ろうとしていた一夏。

その途中で彼は、ちょうど部屋に戻る途中だった鈴音に恐るべきことを聞いてしまった。

『一夏、あんたが落としたって言うディスク、返す前にシャルロットとラウラの部屋でみんなが見るって言ってたわよ。

って、あんた何でISを……きゃーっ！』

その瞬間、一夏は白式を展開していた。

イグニッション・ブースト
瞬時加速を連発し、廊下を駆け抜ける。

廊下ですれ違った女子生徒のスカートはことごとくその風圧でめくりあがり、「イヤーン」と言う悲鳴が上がる。まいっちんぐだ。後で必要になる始末書、謝罪の数々、そして姉による罰を理解しながらも、一夏は止まらない。なぜなら、あのDVDの中身を知られた時点で彼は社会的に抹殺されかねないからだ。

『頼む。間に合え、間に合ってくれ……』

彼の脳裏でいやな思い出がフラッシュバックする。以前遊びに来た鈴音によってベッドの下にあった本が見つかった時のこと。千冬に姉×弟物のDVDのパッケージを見られた時のこと。

彼女らの部屋がある部屋に到着した瞬間、一夏は悲鳴を聞いた。

そして、部屋から飛び出す3人の少女の姿を見た。

篠ノ之箒、セシリア・オルコット、そしてシャルロット・デュノア。

『破廉恥だぞ一夏ああああっ！』

『不潔ですわ！』

『一夏のスケベ……』

彼女らは一夏の姿を認めると即座にISを装着。武器を展開した。数分後、通報を受けた教師陣による鎮圧部隊は、ぼろ雑巾のように横たわる一夏と、彼を囲むように肩を怒らせて立つ3人の少女の姿を見た。

××××××××××

他の3人が一夏に私的制裁^{リンチ}を加えていた頃、ラウラ・ボーデヴィツヒは部屋でDVDを見続けた。

頬が若干赤くなつてはいるものの、他の3人と比べれば冷静沈着気になる個所は巻き戻してメモを取る程である。

なぜ彼女は（割と）平気でエロビデオを見ていられるのか。それは、わだかまりが解けた黒ウサギ隊の部下達に恋愛の勉強だと言っ

て、ビデオを何本が見せられていたため、耐性があつたからである。
一通り再生が終わると、彼女はディスクをプレイヤーから取り出してケースに戻した。

「意外と普通だったな」

一応内容について解説しておくが、血の繋がりのない姉と弟が酔った勢いでくんずぼぐれつするという話である。これがアニメや漫画なら、間違いなく某都知事が規制する内容。

もし一夏の趣味がいささかマニアックだった時のためにハードな内容の物を黒ウサギ隊の面々は用意したのだが、取り越し苦労だったらしい。

一夏に犬や鞭を使う趣味がなくて良かった。ラウラはほんと、たいらな胸をなでおろす。

「しかし、あの女優はやけに教官に似ていたな」

ぽつりとそう呟くと、彼女は急にうるさくなった廊下の様子を見に行った。

××××××××××

それから何日か後。

治療を受けた後、ISの指定区域外での使用のかどで特別教育室での生活を余儀なくされていた一夏。彼が刑期を終えて部屋での就寝が出来るようになった晩、ラウラが彼の部屋にやってきた。そし

て布団にもぐりこむと、彼の寝巻きのズボンを下ろそうとしたではないか。

「何するんだよ、ラウラ！」

「あの映像と同じ事だ。む、下履きが膨らんだな」

「それはヤバイ、ヤバいつて！」

軍体流の捕縛術を受け、ぐるぐる巻きの一夏。それでもパンツは守っている。

「安心しろ。夫婦なら普通だ」

「相手を縄で縛っていたす夫婦なんているか！」

居ないこともない。たぶん。

「私が以前見た物では大抵縛っていたぞ。鞭や犬の方が良かったか？」

「ラウラ、それ絶対間違ってる！！」

まあとにかく、一進一退の攻防で耐え抜いた一夏は、眠れない夜を過ごすのでしたとき、めでたしめでたし。

おわり。

（後書き）

短いバカ作品ですが、最後まで読んでいただきありがとうございます。
ました。

筆者は現在就職活動中なのですが、IS<インフィニット・スト
ラトス>にアニメから入ってはまり、ついつい原作を購入して短期
間で書き上げました。そのためおかしな点多々あると思います。
よろしければ不満点などを感想としてあげてくださると、今後改善
していく所存であります。

2011年3月10日本文を加筆修正。

2011年3月16日更に修正。鈴の苗字を間違えてました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3544r/>

IS＜インフィニット・ストラトス＞妄想SS 『エロDVD編』

2011年4月21日16時07分発行